榧根：そうして，そうゆうことを繰返しながら考えを進めてゆけないものかと思うのだが．

朝倉：両方がぶつかったところに原因を求めようという意味か．

榧根：見かけ上の原因でもいいから……というのは，たとえ仮説をたてても仮説の中に含まれている誤差の範囲もかなり大きい，場合によってはその判定もつかない．そうゆう前提での議論はできるが，それ以上に進んでどこまでが原因でどこからが結果か言いきることはできない．これは気候変化にいつでもつきまとう問題だが，やり方の上で何かいい方法がないかと思って…….

朝倉：賛成だ，高橋さんのもそれに類した意見だったと思う．仮説により論理的に一貫して説明できたとしても，仮説に実在性があるか否かは非常に問題だ．それを実験的にありうるものかどうか調べることが最も欠けている点だと思う．

根本：話はちがうが，インドのボンビィが観測上の事実と理論の有効寿命を統計したところ，観測事実のほうが寿命が長いことが判った．理論はどんどん変えられる．しかし真実に近づく早さは理論のほうが早い．つまり観測事実は一度結果がでると，それを疑ってやり直すことをなかなかやらないからだろう．たくさんの科学の例から，統計的にみて観測事実の有効期間は平均20年だそうである．

気候変化は問題が多面に渡っており，ここでシンポジウムとしての結論をだすわけにはゆかないが，問題点はいろいろ指摘された．今後の研究の発展を期して閉会としたいと思う．

以上がシンポジウムでの諸氏の発言のあらましである．内容に不明確な点があれば筆者の不勉強のためである．テープレコーダーからの速記は東京教育大学学生，深石一夫・立石由己両君にお願いした，心からお礼申しあげる．なお文中の敬称はすべて“さん”とした．礼を失する点があったらお許しいただきたい．（榧根勇記）

なお発言者のうち例記以下の諸氏の所属は次の通りである．

根本順吉（長期予報）
朝倉　正（長期予報）
杉浦吉雄（研究所）
今村学郎
高橋浩一郎（長期予報）
水越允治（三重大）
榧根　勇（東京教育大）　発言順

気象の英語（42）

45. 〝この〟を表わす英語

〝この〟は this で，〝あの〟は that だと云うことは英語を習い初めたとき，まっ先に教わることである．ところが，日本語で〝この〟といっても，前に出て来た抽象的な事柄を指すときは this を使わないのが普通である．では何であらわすかというと，that（または that＋名詞）か the＋名詞を使う．（注：前に出て来た2つの名詞を指す場合，〝前者〟を that，〝後者〟を this で表わすことがある．）

シェルハーグ（1952）が成層圏における急激な気温上昇について報告して以来，多くの学者がこの問題ととり組むようになった．

という場合の〝この〟は普通 this では表わさない．〝この問題〟は the problem（または that problem）である．つまり

＝Since Scherhag's report on the explosive stratospheric warming many meteorologists have come to grips with **the** problem.

具体的なものを指示する時は，this も使われるが，this はこれから述べることを指す時に用いられることが多い．たとえば

This Chapter contains a theoretical discussion of the oscillations excited in a rotating atmosphere by gravitational action. (M.V. Wilkes)

で，this chapter というのは，〝これから述べるこの章〟という気持である．

また，〝この〟と指したら，それではっきりしてしまうから，限定的修飾語を更につけるとおかしい．〝この問題の逆転〟を this inversion in question と云うのは不自然である．the inversion in question で十分はっきりしているからである．this remarkable inversion などという表現については，remarkable は限定的に使われた修飾語ではないから，この限りではない．（有住）